
遊戯王 ああっ破滅の女神さまっ

ダルクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 ああつ破滅の女神さまっ

【Nコード】

N2849Z

【作者名】

ダルクス

【あらすじ】

ある日、死んだ父の形見として、主人公の元に届けられた二枚のカード。それは世界を破滅させるほどの力を持つカードの精霊、『破滅の女神ルイン』を宿すカードと、彼女専用の儀式魔法『エンド・オブ・ザ・ワールド』のカードだった。これは、数奇な運命に翻弄される一人の青年、そして「破滅」の力を司る女神と、彼らを取り巻く精霊たちの長きに渡る闘いの物語である…。

第1話：「出会い」（前書き）

皆さん初めまして、ダルクスと申します。

このサイトで小説を書くのは初めてなのですが、皆さんのご期待に添えられるよう、頑張っていきたいと思っています。

この作品の舞台は5D・sの延長線上の世界となります。

5D・sとZEXALの中間あたりだと考えていただきます。

故に、シンクロモンスターもモンスターエクシーズに加え、原作、アニメ、ゲームのキャラも登場予定です。

主人公はオリジナルの主人公です。

それでは、始めさせていただきます。

第1話：「出会い」

…「デュエルモンスターズ」。

名前を聞いたことがない人はまずいだろうと言われている、この全世界で爆発的なブームを巻き起こしているカードゲームには、ある一つの不思議な噂がある。

それはごく稀に、このゲームを心から愛している者の前にだけ現れるといわれているカードの精霊の存在…。

これは、数奇な運命に翻弄される一人の青年、そして「破滅」の力を司る女神と、彼らを取り巻く精霊たちの長きに渡る闘いの物語である…。

第1話「出会い」

…親父が死んだ。ついひと月前の事だ。

俺の親父は考古学者だった。常に世界中を旅して渡り、帰ってくるのは一年に片手で数えるくらい。たまに帰ってきたかと思えば、怪しい発掘品やオーパーツを土産に渡される始末。はつきり言ってダメ親父の印象しかない。

しかし、そんなダメ親父でも、死んだと連絡が入ったときは悲しかった。

たった一人の息子を残して、親父は外国の遺跡発掘の調査の途中に落盤事故に遭い、そのまま帰らぬ人となった。

親父には兄弟も親戚もない…故に俺を引き取ってくれる身内などいなかった。しかし、親父が死んだ後も、寂しいという気持ちには不思議とならなかった。きっと、親父の帰ってこない生活に慣れてしまっていたからだろう。

そんな親父の葬儀も終わって一段落し、ひと月ほど経ったある日、俺の家に小包が届いた。差出人は親父の研究グループの一人からだった。

包みを開くと、まず差出人が書いたと思われる手紙が入っていた。

『君のお父さんが自分にもしもの事があった時、君に渡してほしいと言われていた物だ』

手紙にはそう書かれていた。改めて届けてくれた物を見る。

「箱…？」

それは小さな箱だった。いや、おそらく親父が渡したかった物はこの中に入っているのだろう。

俺は蓋に手をかけ、ゆっくりと開ける。

「これって…カード？」

箱の中身はデュエルモンスターのカードだった。箱をひっくり返して、掌の上にあけてみると、二枚のカードと一枚の紙切れが落ちてきた。

俺はまず、紙切れの方を手にとってみた。そこには親父の字で、こう書かれていた。

『某国を冒険中、私は精霊が宿るといわれているこのカードを発見した。だが精霊が出現するのは限られたデュエリストの手に渡った時のみと言われている。どうやら私はそれに値する人間ではないらしい…。お前になら、このカードが応えてくれるだろうと、私は信じている』

相変わらず、実の息子に宛てたとは思えないほどに堅苦しい文面の手紙を見て、俺は少し懐かしい気持ちになった。

そして改めて、カードの方を手にとってみた。最初は半信半疑だった。確かに俺も精霊の噂は聞いたことがあるが、それは所詮噂程度の物だと思っていた。

また紛い物を掴まされたんじゃないかと思い、まじまじとカードを眺めてみる…。その時だ！

カッ！！

「うわっ…！？」

突然カードが光を放ち、俺は思わず握っていた二枚のカードを床に落とし、後ろに倒れ込んで腕で目を覆った。光が止み、ゆっくりと目を開けてみると…。

「???」「汝、世界の破滅を望む者か？我が主よ…」

目の前には一人の女性が立っていた。
流れるような銀色の長髪…碧い瞳…そして手には赤いロッドを握っている。

「だ…誰…？」

面喰っている俺に対し、その女は静かな声で答える。

???「我が名は『破滅の女神ルイン』。主のお呼びに与り、ここに顕現した」

これが俺と、破滅の女神ルインとの出会いだった…。

…
…
…

「…どうしてこうなった」

今、自分のことを「破滅の女神」と名乗った謎の女性ルインは、居間でこの状況を頭の中で必死に整理している俺の前に対峙して正座している。

「え〜とつまり…死んだ親父から送られてきたカードが実は本当に精霊の宿るカードで、あんたはそのカードに描かれている破滅の女神ルイン本人だっていうのか？」

ルイン「その通りだ、主よ」

「マジかよ…」

今まで親父から送られてきた物は、みんな紛い物が偽物ばかりだった。今回もきつとその類だと思っていたら…親父の奴、最後の最後でとんでもない物を置き土産に置いてきやがった。

ルイン「主よ」

「…ん？」

ルイン「主はもしかして世界の破滅を望んで私を顕現させたわけではないのか？」

「いや、残念ながら…俺はこの世界を一度も破滅させようなんて思っただけじゃないし、あんたを呼ぶ気もなかった」

ルイン「では何故…？」

「こっちが聞きてえよ…」

でもまあ…呼んじまったもんは仕方ない。わざわざ呼んでおいて「帰って下さい」なんて言えないし、それにこの人…なかなか美人だし…。

ルイン「ん？何か言ったか主？」

「い、いやなんでもない！まあとりあえず、あんたが本当にカードの精霊だっていうなら何か精霊らしいことをしてみてください」

ルイン「精霊らしいこと…？」

「そうだ。あんたが普通の人間じゃないっていう証拠を」

ルイン「ふむ…わかった」

そう言つてルインは立ち上がり、家の縁側の方に歩み寄っていく。

「…？」

なにをするつもりだろう？と疑問に思いつつ、その様子を見守る。
ルインは縁側の戸を開け、庭に向けて手を持ったロッドを翳す。すると…。

ルイン「…ハッ！」

短い掛け声があがり、ロッドの先から火の玉が放たれ、庭に飾つてある灯籠に命中に、粉々に碎け散った。

「なっ…！？」

ルイン「どうだ主、これで満足か？」

若干誇らしげな顔で俺に語りかけるルイン。

「え…？あ…はい…すごい…ですね」

ルイン「こんなもの、私の力の一部にすぎない。なにはともあれ、これからよろしく頼むぞ、主」

呆然とする俺の前でルインはさらに誇らしげな顔をした。

「は、はい…」

軽い気持ちでルインを迎え入れたのだが…どうやらとんでもなくことになりそうだ。

第1話：「出会い」（後書き）

皆さん初めまして、この度この小説を書かせていただくダルクスと申します。

何故よりによつて破滅の女神ルインなのかって？

答えは簡単、私が好きだからですw

なにはともあれ、これからよろしく願います。

第2話：「女神様との楽しい(?) お買い物」

「こんなもんかな」

一人机に向かっていた俺は、たった今組みあがったデッキを机の上に置いて小さく呟いた。

ルインが現れて一日経った今日、俺は『破滅の女神ルイン』と、それ専用の儀式魔法カード、『エンド・オブ・ザ・ワールド』のカードを、なんとかしてデッキに組み込もうと模索していたのだ。元々、俺のデッキは儀式専門のデッキではなかったのだが、この二枚のカードの投入により俺のデッキの方向性がガラリと変わった。

「さて、今日はどうするか…」

デッキが組みあがってひと段落した俺は、休日の午後をいかにして過ごすかを考えた。

「なあ、ルイン」

ルイン「む？」

俺の部屋の端でずっと膝を抱えてテレビを見ているルインに、俺は声をかける。

「今日の午後、どこか行きたい場所はあるか？」

ルイン「私は特に…一日中このテレビという物を見てもいいのだが」

どうやらこの女神様、テレビをさぞ気に入った様子だ。

ルイン「このテレビという物は凄いな、これを見ているだけで大抵の情報を得ることができる」

全く…テレビが好きなカードの精霊なんて…。

「そういえば、カードの精霊は他人には見えないっていう噂があるんだが、お前はどんなんだ？」

限られた者にのみ見ることができるとされているカードの精霊…その存在が見えない人に対しては、見える者がただの不思議ちゃんか電波扱いされるという話をよく聞く。

ルイン「主よ、私をそんじょそこらの精霊と一緒にされては困るな」

「どういう意味だ？」

テレビから目を離すことなくルインは話を続ける。

ルイン「精霊は精霊でも、私は女神という存在だ。他の精霊とは精霊としてのランクが違う。故に一度この世界に顕現すれば、主以外の人間でも私の姿を目視することができる」

「ようは俺以外でも姿が見えるってことか…よし」

それを聞いて俺はある決心をし、席を立ち、ルインの元に歩み寄る。

ルイン「どうした主？」

ようやくテレビから目を離し、俺の方を見上げて不思議そうな顔をするルイン。

「午後の予定が決まった。俺と一緒に買い物しに街に行くぞ」

ルイン「私も行くのか？」

「当然。お前の姿が誰にでも見えるっていうなら、まずは普通の服を手に入れなきゃいけないからな」

いくら本物のカードの精霊とはいえ、その存在をおおっぴらに世間に広めるわけにはいかない。出来うる限りこのルインに普通の人間としての振りをさせておかないと…。

ルイン「うむ…わかった、主の命令では仕方ないな」

ルインは大人しくテレビのリモコンを手にし、テレビの電源を切る。

ルイン「では、行くでしょうか主」

「待て！」

なに食わぬ顔で部屋を出ようとするルインに俺は待ったをかける。

ルイン「なんだ？」

「その格好で外に出るわけにはいかないだろ…」

ルイン「あ…主よ…この格好はさすがに…」

「我慢してくれ」

そんなこんなで俺とルインは街に出ることになった。

で、問題なのはルインの格好なのだが…さすがにあの格好のまま表を歩かせるわけにもいかず、今は俺が授業で体育のときに使うジャージを着せている。

幸い彼女の背が高いおかげで、男用のジャージは無理なく着せられたのだが…それでも長い銀髪に不釣り合いなのは変わらず、周囲の注目を集めることになった。

ルイン「これからどこに行くのだ？」

「ひとまず、デパートに行こう。服もあるし、他にも食品とか買い物しなきゃいかんからな」

………

………

…

ルイン「おお！なんだこの動く階段は!?!」

「エスカレーターだよ」

デパートに到着して早々、ルインは動く階段ことエスカレーターに驚きの声をあげた。

現代のたいていの知識はテレビで学んだらしいのだが、どうやらエスカレーターの存在まではまだテレビでは見なかったらしい。

ルイン「なるほど、乗っているだけで前に進むのか。これはなかなか楽しいものだな。よし、もう一度乗ってくる」

「頼むからやめてくれ」

……

……

…

「さあて、まずは服を……ってあれ？」

エスカレーターを乗り継ぎ、婦人服売り場まで来た俺だったが、ふと後ろを振り向くとさっきまで後ろに付いてきていたはずのルインの姿がない。

「あいつ…どこに行ったんだ？」

こんな広いところであんな右も左もわからない女神を野放しにすれば、何をしでかすか分からない。急いでルインを探そうと、俺は上ったエスカレーターを一旦降り、下りのエスカレーターに乗りうとした、その時。

ピンポンパンポン

『迷子のお知らせを申し上げます』

突然チャイムと共に場内アナウンスが流れた。

「ん？」

『えゝ…破滅の女神のルイン様の主様。迷子センターにて……』

この時、俺はすでに脇目も振らず走り出し、迷子センターへと駆け抜けていった。

……

……

…

迷子センターに到着し、俺はその扉を開ける。

「ルイ……なっ！？」

そこで目にしたのは…何とも衝撃的な光景だった。

ルイン「や、やめっ…こらっ！やめろゝゝ！」

子供A「あははっ！おねえちゃんよわゝい！」

ルイン「こ、こらっ！服を引っ張るな！」

子供B「ねえ、なんでおねえちゃんのかみぎんいろなの？」

ルイン「痛っ！ちよっ、髪を引っ張るなっ！！わ、私は破滅の女神なんだぞ！？」

迷子センターにいた、迷子になっているちびっ子達に襲われ……もとい遊ばれていた。3、4人の男の子や女の子に押し掛かられている。

係員「あ、ルインさんの主さんですか？」

面白いのでしばらく見ていたら、迷子センターの係のお姉さんが俺に話しかけてきた。それにルインも俺に気づいたらしく、

ルイン「あ、主！た、助けてくれっ！」

少々涙目で俺の後ろに隠れた。女神がちびっ子を恐れてどうする…。

「あ、すみません。うちの……えっと、姉がお世話になって」

言った後でなんだが、正直この嘘はどうかと思った。だって片やのどこにでもいる普通の純日本人の青年と、片や髪が銀色で十人に聞いたら十人とも美人だと言うほどの整った顔立ちをしている破滅の女神様だぜ？ジャージ着てるけど…。

係員「お姉さんなんですか？」

「は、はい。つい最近まで海外に住んでたものですから、その…ここでの常識がちょっと…」

やはりこのごまかしは無理があるか…と思ったが。

係員「ああ、そうなんですか。次からはお姉さんから目を離さないでくださいね？」

「は、はい」

意外にも物分かりの良いお姉さんでホツとしつつ、俺はルインの手を引いて迷子センターの扉を開けた。

子供C「ばいばい、めがみのおねえちゃん！」

子供D「またカイバーマンごっこしようね」

その際、何人かのちびっ子達に見送られた。

ルイン「う…うむ、バイバイ」

若干疲れた表情をしてルインは応え、俺とルインは迷子センターを後にした。

「ルイン…またなんでこんな所に？」

ルイン「い、いや…あの動く階段に乗っていたら、いつの間にか…」

「はあ…お前なあ、これからは俺の傍を離れるなよ？」

ルイン「わ、わかっている！」

先ほどのちびっ子との戯れがトラウマになってしまったのか、微妙に落ち込み気味なルインを引き連れて、俺達は買い物を続行した。

………
………
………

「へえー、新しいストラクチャーデッキ出たんだ。今度は除外とドラゴンが主体のデッキか…」

おもちゃ売り場にて、俺は新発売のデュエルモンスターの新しい構築済みデッキを見ていた。

ルイン「おい主、この『ぶらじゃー』というのはどうやって使うんだ？」

その時、またどこかに行っていたルインは、この場にもっとも相応しくない物を手に持って、俺の前に広げて見せてきた。

「黒か……じゃなくて！そんな物どこから持ってきた！？」

ルイン「らんじえりーうりば、と言う所からだが」

「すぐに戻してこい！」

ルイン「何故だ？あ、そうだ。私にはよく分からないから主も一緒に来て選んで……なぜ主は顔が赤いんだ？」

「いいから戻してこい！！」

俺の顔に覗き込んでいるルインの手を引いて、ルインが持ってきた下着を元の場所に戻しに行った。その際、周りの人からのクスクス笑いが心に痛かった…。

…
…
…

「はあ… なんだか凄く疲れてきた」

ルイン「いや、買い物とはなかなか楽しいものだな」

こっちは全然楽しくない！と、心の中でルインにツツコミつつ、俺は何気なく掲示板に張られてある広告を目にした。

「デュエルモンスターの大会…？ 今日午後三時から屋上でか…」

どうやらこのデパートで、これからデュエル大会が開かれるらしい。

「へ、優勝賞品はこのデパートで使える一万円分の商品券か。新デッキも試してみたいし、ちょうどいいかもな」

ルイン「なんだ主、この大会とやらに出るのか？」

「ああ。参加自由らしいし、優勝すれば金も浮くし、デッキもデュエルディスクもカバンの中にあるしな」

そう言うて俺はカバンの中にあるデュエルディスクとデッキえおルインに見せる。

デュエリストたる者、この二つは常に持ち歩いてないとな。

ルイン「このデッキに、私のカードが入っているのだな」

「そうだ。受付は二時半からか…よし、すぐに屋上に行くぞ」

ルイン「うむ、わかった」

俺達はエレベーターに乗り、屋上へと向かう。

その際にまたルインが「動く部屋だ」と言って騒いだのは、言うまでもない…。

続く。

第2話：「女神様との楽しい(?) お買い物」(後書き)

次回からはいよいよデュエル回です。

そういえば今日はリアルでドラゴニック・レギオンの発売日でしたね。

私もこれから買いに行ってきますノシ

第3話：「装着！甲虫装機（インゼクター）コンボ」

「『スピア・ドラゴン』で守備表示の『ゴブリン突撃部隊』を攻撃！
ドラゴン・スクリュー　！！」

「うわゝ！負けたあゝ…」

「お、やってるやってる」

俺達が屋上に着くと、二人の小学生がステージの上でフリーデュエルをしていた。

ルインは熱心にその様子を眺める。

ルイン「あれがこの世界でのデュエルか、すごいな。モンスターがまるで本物みたいだ」

「ああ、ソリッドビジョンシステムとかいうのでカードを立体映像で映しているんだ」

この世界でのデュエルを俺なりにわかりやすく伝えつつもりなんだが…ルインは頭の上に「？」の字が浮いているかのような顔をして首を傾げる。

「ま、まあ俺も詳しい仕組みはよくわからないんだけど、要するに幻想さ」

ルイン「幻想か…なるほど」

どうやらこの説明で納得してくれたみたいだ。

「さーと、受付場所は…」

???「あれ？おい！こんなところで何してるの？」

「ん？」

遠くから俺を呼ぶ声が聞こえる。

俺は声のした方を見ると、その声の主は小走りでこっちに走ってきた。

「あれ？アリアじゃん、なにやってんだ？こんなところで」

第3話：装着！インゼクター甲虫装機コンボ

アリア「こんにちは」

「こんなところで会うなんて奇遇だなあ、アリアもデュエル大会に出るのか？」

アリア「うん。買い物についてだけだね」

楽しみに答える彼女の名前は加護アリア。俺の高校のクラスメートにして、小学生の頃からの幼馴染だ。

頭の横で二つに束ねたくり色の髪と、最近視力が落ちてきたのか厚い眼鏡と、そして発育がいいのか…大きい胸が特徴的の女の子だ。

ルイン「主？この者は…」

アリア「あれ？そっちの方は？」

「あ！え」と…」

そうだった…ルインのことをすっかり忘れてた。

まさかカードの精霊だなんて言えるはずないし…ここはひとつ、またあの嘘でごまかすか。

「お、俺の姉のルインだ。（……………あつ！）」

しまった！ついはずみで言ってしまったが、アリアは俺の幼馴染じゃないか！

さっきの迷子センターのお姉さんならまだしも、さすがに幼馴染ではごまかしが効かないか…？

アリア「え？お姉さん？本当に？今まで全然知らなかったよ」

「い…いや俺もつい最近知ったんだけどな、どうやら親父の奴、俺が生まれる前に海外で別の女の人と関係持ってたらしくって…」

アリア「へー、あのあじさんがねえ…。昔から真面目で無愛想だったけどそんな一面もあったのね」

親父「すまん！死んだあんたにあらぬ誤解を受けさせるハメになっちまった…」

アリア「改めてよろしくお願いします、お姉さん。私、加護アリアっています」

ルイン「うむ、よろしくなアリア。しかし主にも年頃の女友達がいとはな」

アリア「え？あるじって？」

「げっ！？えつと、それは…」

『間もなくデュエル大会を開催いたします。受付を済ませていない方は受付カウンターまでお越しください』

その時、タイミング良くアナウンスが会場内に響き渡る。

「お、おいアリア！まだ大会受付してないだろ！早く受付に行こうぜ！」

アリア「あ、うん。そうだね」

この場をなんとかごまかそうと、俺はアリアを受付場まで誘導させた。

その後、ルインを端の方まで連れて行ってこう言った。

「いいか？俺とお前は姉弟ってことになってんだから話を合わせろよ？」

ルイン「うむ、わかった」

「それともう一つ、誰かの前で俺のことを呼ぶときは『主』って呼び方はやめろよ」

アリアに俺が変な趣味の持ち主だと誤解されたらかなわんからな…。

ルイン「わかった、ある…弟よ」

「よし…それでいい。じゃ、俺も受付行ってくるから」

ルインをその場に残し、俺は大会の受付にへと向かった。

ルイン「…弟か…懐かしい響きだな」

……

……

…

「『デュナミス・ヴァルキリア』でダイレクトアタック！」

決闘者「うわー！」

L P O

俺は自前のデッキで順調に勝ち越せていった。
どうやら新デッキの力は、なかなかのものらしい。

ルイン「すごいじゃないか主！三連勝だぞ！」

デュエルが終わるとステージを降り、応援してくれていたルインの元に戻る。

「伊達に数年間やってないよ」

大会は16人のトーナメント制で行われている。今ので準決勝だったから、次で決勝戦だ。

「ということは決勝戦の相手は…」

『間もなく決勝戦を行います。準決勝を勝ち抜いたお二方はステージ上にお上がり下さい』

アナウンスがかかり、俺はステージにへと向かう。

ルイン「主、頑張れよ！」

「主はやめろって…行ってくるよ」

ステージに上がると、ステージ下のギャラリーからルインが顔を覗かせる。

そして決勝戦の相手が、俺の前に対峙する。

「やっぱりお前か、アリア」

アリア「久しぶりだね、こうやってデュエルするのは」

「だな、だが勝つのは俺だ！」

アリア「望むところよ!」

「デュエル!!」

「先攻は俺からだ、ドロー!」

俺は高らかにデッキからカードをドロウする。

「まずはこいつだ、『終末の騎士』を召喚!」

フィールドにボロ布と黒い甲冑を纏った騎士が現れる。

【終末の騎士】	4	ATK/1400	DEF/1200	闇 戦士族
---------	---	----------	----------	----------

「『終末の騎士』が召喚に成功したとき、デッキから闇属性モンスター1体を墓地に送る。俺は『儀式魔人プレサイダー』を墓地に送る」

アリア（今までのデッキには無かったカード…ふーん、デッキ新しくしたんだ）

「先攻は最初のターン攻撃できない。俺はこれで、ターンエンドだ」

手札：5枚 LP：4000

アリア「私のターン、ドロ」

ジャンプしながら楽しそうにカードをドロするアリア。

アリア「ふっふん、いいのかな？そんな無防備なフィールドで私にターンを明け渡して」

「なに？」

アリア「私のモンスターは…これ！来て、インセクター 甲虫装機 ダンセル」

アリアのフィールドに赤いイトトンボを模した格好をしたモンスターが召喚され、銃を構える。

インセクター
【甲虫装機 ダンセル】 3 ATK / 1000 DEF / 1800
0 闇 昆虫族

アリア「さらにさらに！『ダンセル』の効果発動、1ターンに1度、手札の『甲虫装機』と名のついたモンスターを『ダンセル』に装備することができる！私は手札の『甲虫装機 ホーネット』を『ダンセル』に装備、いくよ、ゼクト・イークイップ」

『ダンセル』の右腕に、『ホーネット』のパイルバンカーが装着される。

「そして『ホーネット』を装備したモンスターは、攻守を『ホーネット』の分までアップさせ、レベルを3つ上げる！ ホーネットの攻撃力は500、守備力は200、よってその数値分アップ！」

甲虫装機 ダンセル：ATK/1000 ↓ 1500 DEF/1800 ↓ 2000 3 ↓ 6

ルイン「攻撃力が『終末の騎士』を超えてしまったぞ！？」

「いや…それだけじゃない！」

アリア「いづくよ」装備された『ホーネット』の効果発動♪装備状態のこのカードを墓地に送り、相手フィールドのカード一枚を破壊する！射出！ ポイズン・バンカー！！！」

『ダンセル』に装着されたパイルバンカーから杭が放たれ、それは『終末の騎士』の身体に突き刺さり、毒によって蝕まれ、消滅した。

「やってくれるな……」

甲虫装機 ダンセル：ATK/1500 ↓ 1000 DEF/2000 ↓ 1800 6 ↓ 3

装備カードが無くなったために『ダンセル』のステータスは元に戻るが…ここからが本当の地獄だ…！

アリア「そしてここで『ダンセル』の効果発動♪このカードに装備

された装備カードが墓地に送られた場合、デッキから他の『甲虫装機』を特殊召喚するよ！来て！『甲虫装機 センチピード』♪」

【甲虫装機 センチピード】 3 ATK/1600 DEF/1200 闇 昆虫族

ルイン「イトトンボの次はムカデか…」

アリア「そして『センチピード』の効果発動！今度は墓地から『ホーネット』を装備するよ？ ゼクト・イークイップ ♪」

『センチピード』の右側のカッターが消え、代わりに『ホーネット』のパイルバンカーが装着される。

アリア「そして攻守・レベルともにパワーアップ♪」

甲虫装機 センチピード：ATK/1600 ↓2100 DEF/1200 ↓1400 3 ↓6

アリア「フィールドにモンスターは無し…よしっ！バトルフェイズいくよ！まずは『ダンセル』でダイレクトアタック！ターゲットロツク！ダンライガン、シュート…！」

『ダンセル』が銃の照準を俺に合わせると、スコープ越しに俺を狙い撃つ！

「ぐっ…！」

LP4000 ↓3000

アリア「まだまだ攻撃は続くよ！さらにパワーアップした『センチ

『ピード』でダイレクトアタック！斬り裂け！ センチュリオン・カッター――！』

『センチピード』はカッターをまるで手裏剣のように投げ放ち、俺の身体を斬りつける。

「ぐあぁっ……！」

LP 3000 ↓ 900

ルイン「なっ！？ある……弟のライフが、わずか1ターンで1000以下にまで減らされただっ！？」

ルインが驚くのも無理はない……。

アリアが使うモンスター群……『甲虫装機』。個々のモンスターの能力は決して高いとはいえないが、互いが互いを強化しあうそのコンビネーションはかなり強力だ。

俺も何度このコンボに苦しまれたことか……。

「だがお前はいつもツメが甘い。俺のライフをいつもあと一歩までは追いつめるが……結局はそこまで、最後はペースを乱して逆転される」

ルイン「へ？そうなのか？」

「ああ、こいつとデッセルしてると序盤はもう少しってとこまで攻めてくるんだが、それ以上は俺のライフを削ることはない」

アリア「そ、そんなことないよ！確かにいつもはそうだけど……でも今日は違うもん！絶対勝つもん！」

俺の言葉にアリアは必至で反論する。

「お前いつもそんなこと言ってるよな……」

アリア「ん……もう！そうやってまた私のペースを乱そうとするんだから……ターンエンドだよ！」

□
手札：3枚 LP：4000

さて……とはいえ、あまり悠長に構ってもいられないな。

「俺のターン、ドロー！」

よし、このカードなら『甲虫装機』のコンビネーションを崩すことができる。

そのためにはまずはこのカードで……。

「速効魔法『サイクロン』を発動。フィールドの魔法・トラップカード一枚を破壊する。装備カード状態となっている『甲虫装機』は装備魔法扱い。よって、『ホーネット』を破壊する！」

フィールドに発生した竜巻は、『センチピード』のパイルバンカーを吹き飛ばす。

アリア「うつ……でも次のターンでまた装備させれば……！」

「さらに、『デュナミス・ヴァルキリア』を召喚！」

【デュナミス・ヴァルキリア】 4 ATK / 1800 DEF /
1050 天使族 光

「『デュナミス・ヴァルキリア』で『ダンセル』に攻撃！ エンジ
エル・ダスト ー！」

『デュナミス・ヴァルキリア』が放つ光の粒子によって、『ダンセ
ル』は消滅する。

アリア「くうっ…！」

LP 4000 ↓ 3200

「さらにカードを二枚セットして、ターンエンドだ」

■ —
■ —
手札：2枚 LP：900

アリア「えっ…ターンエンド!？」

ルイン「どういふつもりだ主…！『センチピード』をフィールドに
残したままでは、また効果によって『ホーネット』を装備されてし
まう！そうなればまたカードを破壊されて…」

いやルイン…これでいいんだ。全ては俺の伏せたりバースカードに
答えがある。

アリア「な、なんだかよくわからないけど…私のターン！」

だが万が一、ここでモンスターを引かれたら少しマズいかもしれん

が…。

アリア「（うつつ…召喚できるモンスターがない…）わ、私は『センチピード』の効果発動！対象のモンスターは…！」

ふっ、アリア。やはりお前はツメが甘いな。

「チェーンだ、リバーズカードオープン！速効魔法『禁じられた聖杯』！」

アリア「ふえっ！？」

「『禁じられた聖杯』は、対象にしたモンスター1体の攻撃力を400ポイントアップさせる代わりに、そのモンスターの効果を封じる。対象はもちろん、『甲虫装機 センチピード』！」

甲虫装機 センチピード：ATK/1600↓2000

「これで『甲虫装機』同士のコンビネーションは断ち切れた！」

アリア「でも攻撃力は2000にアップしたよ！このままバトル！『センチピード』で『デュナミス・ヴァルキリア』を攻撃！」

『センチピード』が Cutter を構え、『デュナミス・ヴァルキリア』に向けて放つ！

「アリア、俺がお前のモンスターを『聖杯』の効果で攻撃力を上げたのには、もう一つわけがあるんだぜ？」

アリア「へ…？」

「リバーズカードオープン！トラップカード、『フォトナイズ光子化』！相手モンスターの攻撃宣言時、その攻撃を無効にする！」

『デユナミス・ヴァルキリア』の身体が光の粒子となって消え、『センチピード』のカッターは虚空を切る。

アリア「粒子化した！？」

「粒子化じゃなくて光子化だ。さらにその相手モンスターの攻撃力分だけ、俺のフィールドの光属性モンスター1体の攻撃力は、次の俺のターンのエンドフェイズ時までアップする」

アリア「なっ…！」

粒子化した『デユナミス・ヴァルキリア』はフィールドに舞い戻り、更なる力を得て輝きを増す。

デユナミス・ヴァルキリア：ATK/1800↓3800

ルイン「おお！攻撃力が大幅に増大した！そうか、主は自分のモンスターをパワーアップさせるためにも『禁じられた聖杯』を！」

アリア「う、うまいコンボね…私は一枚カードをセットしてターンエンド。そしてエンドフェイズ時、『センチピード』の攻撃力は元に戻る」

甲虫装機 センチピード：ATK/2000↓1600

■
手札：4 LP：3200

「俺のターン、ドロー！」

ドローカード：『エンド・オブ・ザ・ワールド』

このカードは…ルインの儀式魔法…！

ルイン（主よ、引き当てたか）

だが今はまだ使えない。今俺がやるべきことは…。

「バトルだ！『デュナミス・ヴァルキリア』で『センチピード』に攻撃！ フォトナイズ・エンジェル・ダスト ！！！」

攻撃力が3800にまで跳ね上がった『デュナミス・ヴァルキリア』の攻撃は、『センチピード』を消滅させ、アリアのライフポイントを大きく削る。

アリア「うつつ…！！」

LP：3200 ↓ 1000

ルイン「おお！ついに主とアリアとのライフポイント差が100にまで—！」

「どうした？もうおしまいかな？」

アリア「ま…まだまだ！この程度じゃ終わらないよ！」

「なら、カードを一枚セットして、ターンエンドだ。そしてこのエンドフェイズ時、『デュナミス・ヴァルキリア』の攻撃力は元に戻る」

デュナミス・ヴァルキリア：ATK/3800↓1800

■
手札：2枚 LP：900

さて、これで俺の方が若干有利になったわけだが…アリア、お前は どう出る？

アリア「このエンドフェイズ時に永続トラップ発動！『リビングデッドの呼び声』！この効果で、私は墓地の『甲虫装機 ダンセル』を特殊召喚！」

ルイン「またあのモンスターか…これでは、次のターンで『ホーネツト』を装備され、主のカードを破壊されるうえにモンスターまで増やされてしまう…！」

アリア「そして私のターン、ドロー！（こんなところで…終われないんだから！）」

アリアもまだまだこんなところで負けるつもりはないらしく、力強くカードをドローする。

ふっ…どうやらあいつも、デュエリストとしては一人前の誇りを持つてみたいだな。

アリア「（よしっ…！）まずは魔法カード、『おろかな埋葬』を発

動！私のデッキからモンスター1体を墓地に送る！私は『甲虫装機
ギガマンティス』を選択！そして『ダンセル』の効果発動！墓地
の『ホーネット』を装備し、装備を取り外してカード一枚を破壊す
る！私が破壊するのは…そのリバーズカード！」

パイルバンカーから杭が放たれ、俺のリバーズカードに迫る！

「チェインしてトラップ発動！『和睦の使者』！このターン、俺の
モンスターは戦闘では破壊されず、戦闘ダメージも受けない！」

アリア「フリーチェインで発動できるカード…どうやらこのターン
で決めるのは無理みたいね」

アリアの口ぶりからすると…来るな。アリアのエースモンスターが。

アリア「装備カードを外したことにより、『ダンセル』の効果発動
！デッキから『甲虫装機 ギガウィービル』を特殊召喚！」

【甲虫装機 ギガウィービル】 6 ATK / 0 DEF / 260
0 闇 昆虫族

アリア「さらに魔法カード、『共振装置』を発動！自分フィールド
に種族・属性が同じモンスター2体を選択して発動！選択したモン
スター1体のレベルは、もう1体のモンスターと同じレベルになる
！私は『ダンセル』のレベルを『ギガウィービル』と同じレベル6
にする！」

「同じレベルのモンスターが2体…！」

やるつもりだな…あの召喚を！

アリア「いづくぞ」私はレベル6の『甲虫装機 ギガウィービル』と『甲虫装機 ダンセル』をオーバーレイ！」

フィールドに銀河のような渦が発生し、それに『ギガウィービル』と『ダンセル』は吸い込まれる。

アリア「2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築」

やがて2体のモンスターは重なり合って星となり、ネットワーク空間によって出現した巨大なモンスターの周りを回る。

て -

- 無敵の装甲をその身に纏い

！ -

- 神秘のボディが光りを放つ

れ！！ -

- 気高き姿よ、敵を貫く刃とな

アリア「エクシーズ召喚！装着せよ、『甲虫装機 エクサビートル』

「!!」

【甲虫装機 エクサビートル】 6 ATK / 1000 DEF /
1000 闇 昆虫族 エクシーズ

地面を割って出現したのは、黒と金の装甲を纏った巨大なカブトムシ型の甲虫装機モンスターだ。その巨体の周りには、二つの星が軌道を描いて回っている。

『エクサビートル』はその手に持つ槍を構え、俺の前に対峙する。

ルイン「な…なんだ！？この巨大なカブトムシは…！」

「出てな…『エクサビートル』！アリアのエースモンスター…！」

だが俺にだってエースモンスターはいる…。

待ってるよ…破滅の女神の力、見せてやるぜアリア！

続く。

第3話：「装着！甲虫装機（インゼクター）コンボ」（後書き）

使ってみてわかる甲虫装機の強さ。

下手したら後攻1ターン目で主人公のライフ無くなってたぞw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2849z/>

遊戯王 ああっ破滅の女神さまっ

2011年12月10日21時51分発行